

市立函館博物館報サラニップ

**SARANIP**

No. 36 1997. 3. 31

**函館のまちと梁川剛一**

函館山の麓に立つ高田屋嘉兵衛像



高田屋嘉兵衛像 昭和3年制作

嘉兵衛屋敷跡近く、函館山の麓に凛とそびえ立つ<高田屋嘉兵衛像>。光と影の変化や四季折々の自然と調和した美しさ、そして函館を拠点とした北洋漁業の先駆者であり、ゴローニン事件の解決に尽力し、江戸時代の函館の発展に寄与した人物の像として、現在でも市民に愛され続けています。

この銅像の制作者の梁川剛一は明治35年(1902)函館に生まれ、大正5年(1916)父親の転勤で札幌に移住するまでの幼少期を函館で過ごしました。大正12年(1923)、東京美術学校(現・東京芸術大学美術学部)の彫刻科塑像部に入学し、在学中に帝展に<競技>を初出品、初入選し、「ロダンの血が通っている」とその技量は絶賛を受け、彫刻家としての将来が期待されていました。昭和3年(1928)、同学部を首席で卒業したものの、彫刻だけでは生活することはできず、剛一は再び故郷函館に戻ってきます。このころ、近江政太郎は教育会長である齊藤与一郎、図書館長の岡田健蔵と銅像建立の相談をしていました。彼らと親交があり、函館の名士の胸像を数多く手掛けていた剛一に制作が依頼されたのは当然の流れでしょう。剛一は高田屋に関する本をむさぼり読み、文化10年(1813)箱館奉行の代理として大命を受け、論書を持参

しリコルド副艦長と会見する寸前という最も緊迫した姿を、高さ二尺あまりの石膏像に表現しました。

ところが翌年、経費を負担するはずの日魯漁業が出資できなくなり、銅像の建設も中絶しました。その後、剛一は『少年倶楽部』や名作全集・絵本などの挿絵画家として人気を博し、また彫刻家としても帝展、日展を舞台に活躍します。

長い年月を隔てて、昭和31年(1956)高田屋嘉兵衛の百三十年忌を機に銅像建立の気運が高まり、再び剛一に制作が委嘱されました。剛一は他の挿絵や彫塑の仕事を断り、無償でこの銅像制作だけに勤しみ、最初の依頼から実に30年後の昭和33年(1958)除幕式を迎えました。

梁川剛一は昭和61年(1986)に84歳でなくなりましたが、昭和3年制作の<高田屋嘉兵衛像>を含む彫刻と遺品は本人の意向で故郷函館市に寄贈されました。その一部が函館市文学館に展示され、彫刻と挿絵そして発明家としての一面も垣間見ることができます。また、市内を歩くと、昭和10年制作の<明治天皇御上陸記念碑>や、図書館や市民会館、北方歴史資料館などにも彫刻をみつけることができ、人のつながりを大切にし、郷土を愛した梁川剛一の息吹が今なお感じられるようです。

(霜村紀子)

## 平成8年度特別企画展

## 函館の自然詩

## 報告

平成8年度特別企画展『函館の自然詩』は、博物館本館を会場に5月1日から8月31日まで開催され、5,154人の方々に観覧していただきました。

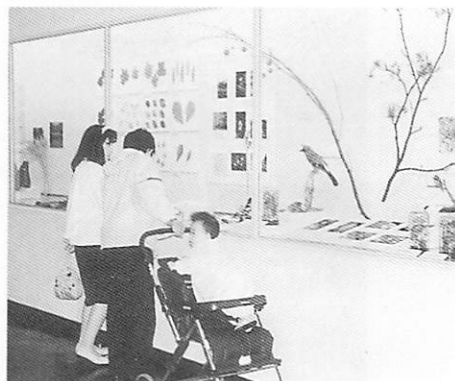
今回の展覧会では、函館市民のシンボルとして最も親しまれている函館山を含む函館および函館周辺の自然について、春・夏・秋・冬の変化を追いながら、主に季節の代表的な動植物を取り上げ展示しました。

具体的には、導入部では函館市や道南地方を空中写真や地形図などで紹介しました。「プロローグ 冬～春へ」では、冬の静かさを表現する木々の芽を中心に紹介しました。「第一章 春」では、春の訪れを示すソメイヨシノの開花やウグイスなどの野鳥たちや春に咲く花で表現しました。「第二章 夏」では、セミやスズメバチの見分け方などを紹介しました。「第三章 秋」では、アカトンボの仲間や体につく種と赤い実のなる木の種類について紹介しました。「第四章 冬」では、海岸を訪れるコクガンなどの冬鳥やキタキツネなどのほ乳類を紹介しました。「エピローグ 自然に親しむ」では、庭に鳥を呼ぶための方法を紹介しました。さらに、星のコーナー

・植物画のコーナー・博物画のコーナー・カラー魚拓コーナー・市民ギャラリーコーナーをもうけました。

展示は、小・中学生でも理解しやすいように心がけたつもりです。それは、自然を身近なものとして考えるためにも必要なことではないかと考えたからです。

佐藤 理夫



▲函館山の植物に見入る観客

## 平成8年度特別展

## 「幕末の箱館」

## 報告

平成8年度特別展は、五稜郭分館を会場に7月23日から9月22日まで開催され、32,058人の方々に観覧していただきました。

今回の特別展は、五稜郭と弁天岬台場の築造を中心に開港の影響を受け変わりゆく当時の函館のまちの様子などを、絵図や図面を中心とした資料によって紹介しました。

開港が函館にもたらしたイメージは「ハイカラ」とい



◀箱館奉行所の資料を熱心に見る親子

った言葉で表現されることがよくありますが、そのイメージが形成される契機となった開港には「ハイカラ」とはかけ離れた、外国との緊張関係が多分にありました。そうした緊張関係が、五稜郭や弁天岬台場の築造と大きな関わりを持っています。このような点をふまえながら幕末の函館の様子をとらえてみました。

展示内容は、「開港前後の箱館」—開港前の海産物の集荷地的性格をもったまちの性格とペリー艦隊入港時の様子などを紹介しました。「開港と箱館のまち」—開港に伴う東北諸藩の函館の警備と外国人と函館の住民との接触の様子などを紹介しました。「弁天岬台場の築造」—現在は残されていませんが、函館ドック付近に築造された台場を紹介しました。「五稜郭の築造」—奉行所の移転問題によって築造された五稜郭と工事に関した人々を紹介しました。「品川台場と龍岡城」—洋式築城を採用する根拠ともなり、箱館奉行となった竹内・堀が普請奉行を勧め、五稜郭・弁天岬台場の石垣工事を手がけた石工喜三郎が関係した品川台場を取り上げ、もう一つの五稜郭である長野県白田町の龍岡城を紹介しました。

保科 智治

## 平成8年度企画展

## 「新収蔵資料展」

## 報告

今年度の「新収蔵資料展」は9月22日から10月20日までの22日間開催し、小学校の団体をはじめ、多数の市民の方々に観覧いただきました。

昨年度新たに登録された資料は、サハリン州郷土博物館から寄贈された考古資料、幕末期の函館に関わる古文書類、そして昨年函館市役所市民ホールで多くの市民の方々のご協力で開催された「戦争と平和資料展」に展示し、その後寄贈された資料など433件606点と例年以上の数です。



▲新収蔵資料展に見入る来館者



▲展示の作業をする実習生たち



▲担当した展示を解説する実習生、真剣に聞き入る実習生

これら分類が違う多くの資料をどのようにまとめ展示し、楽しんで見ていただくかを今回も北海道教育大学函館校14名、宮城学院女子大学1名、静修女子大学1名の計16名の博物館実習生の方々に実習の成果として取り組んでもらい、皆様にお披露目したわけです。

学芸員は最初に展示方法など基本的なレクチャーをするだけで、後は実習生の方が展示企画からキャプション原稿作成、そして実際の展示と短期間のうちに本物の博物館学芸員の仕事をこなしていかなければなりません。最初は不安でいっぱいだった実習生も（私たちも不安でしたが）それぞれ役割分担をうまく行いながら企画したコーナーを徐々に完成させていきました。展示終了後にキャプションの間違いなどオープン直前まで気が抜けませんでしたが、観覧者が自分たちの展示に見入っている姿を見て皆満足そうでした。来年度も実習生が創る展示の予定です。資料とともに展示もぜひお楽しみください。

尾崎 渉

## 博物館実習を終えて

実習生 石川 貴子  
(宮城学院女子大学3年)

9月1日から22日までの三週間、市立函館博物館で実習をさせていただきました。宮城学院生の実習最長期間ということでいろいろ不安な点もありましたが、いざ初日を迎えると、見るもの聞くものすべてが新鮮で、好奇心をかき立てられる毎日でした。

実習では、新収蔵資料展の企画から展示までを中心に、実践的なことを数多く体験させていただきました。どのように展示すれば「モノ」が最大限に生かされるかを常に念頭に置きながらの作業は大変ながらも、学芸員の方々からいただく的を得たヒントと16人の実習生の斬新なアイデアの総括により、何とかやり遂げることができました。

実習の最終日、鳥に詳しいS学芸員が打ち上げの席でポツリとこう言いました。「ぼく、厳し過ぎたかなーと思ってるんだよ」と。そんなことはないのです。私たちは、その厳しさの一つのモノに対する真剣な姿勢やこだわりに触れ、多くのことを学んだのですから…。

最後に、私たち実習生を暖かい眼差しで時には厳しく、時には面白おかしく指導して下さった学芸員の方々、「がんばってね」といつも声を掛けて下さった職員の方々に感謝します。ありがとうございました。

## 平成8年度博物館講座報告

## S P を聴こう

VS.

## 土器を作ってみよう

資料に「いのち」を吹き込んで体験型の講座で生かしてみようとの発想から当館として、はじめての試みとなる講座「S P を聴こう」を8月31日(土)に開催しました。当館には約千点におよぶS P レコードと6台の蓄音機が收藏されています。そのうちの最も古いアメリカ製、(明治38年製造)は使用不能でしたので、昭和初期の日本ビクター社製を用いました。オーバーホールはしていませんでしたから、少々不安でしたが、エンストを起こすことなく終わりまで機嫌良く演奏してくれました。

当日は1号館(明治12年開館の旧開拓使仮博物館)を会場に外国のポピュラー、クラシック、流行歌、それに戦前の地域の歌と4部構成で18曲の曲を鑑賞しました。演奏の合間にS P や蓄音機の簡単な説明をしましたが、参加者(24名)の中には、非常に詳しい方もいらっしゃり、逆にいろいろと教えていただきました。会場には柔らかな音色が響きわたりましたが、クラシックは時間の関係から一面のみの再生でしたので、次回は、ぜひ全曲演奏を希望するとの声がありました。

菅原 繁昭



◀菅原館長の説明をききながら、S P に聴き入る参加者

### 通年講座「函館の星空を探ろう」に参加して

函館市立旭岡小学校6年 西谷 健人

ぼくは2年前、お父さんに勧められてこの講座に参加しました。講座では、星の写真を見たり、実際に星を観察に行ったりします。最初は星のことなどあまりわからなかったのですが、だんだん星座や星の名前を覚えていくうちに、とても星に興味をわいてきました。

望遠鏡で初めて木星と土星を見た時、木星のしま模様や土星の環が見えたり、家の近くで天の川を発見した時はすごく感激しました。家でも星を見たいと思い、お年玉を貯めて、天体望遠鏡を買いました。家族みんなで月のクレーターを見た時はすごくきれいで感激しました。

ある日、ぼくが星を見ていたら、流れ星が見えました。ぼくは思わず「あ、流れ星。」と言ってしまいました。たまにしか見られないものだと思っていたのでヤッターと思いました。その他にも2、3個見えました。ぼくは夜空を見ていたら意外に見えるんだなあと思いました。

星に興味を持ったことで夜空を見る楽しさがわかり、これからもこの講座を続けてもっと、星や星座のことを知りたいと思います。

9月14日(土)、9月21日(土)の両日におわたって、函館博物館本館に35名の小学生を集め、博物館体験学習「土器を作ってみよう」を開催しました。久しぶりの土器作りは、申し込み開始の午前9時から30分で定員になる程の盛況ぶりではじまりました。土器作りの一日目は定番どおり用意した粘土で思いどおりの形と文様を作り仕上げてゆきます。日頃土いじりに縁が遠くなった昨今の遊び事情の中で、黙々と親と時間を忘れて傑作に取り組む姿に、土に接することの新鮮さと作ることの新しい発見が輝いていたことは言うまでもありません。

一週間の乾燥期間を置いて二日目は、期待と不安に包まれた風呂敷の中の土器を大事に抱えながらの土器焼き日です。傑作の出来具合を時折の爆発音の中で心配そうに観察している子供たちのまなざしは、真剣そのものです。壊れずに出来た子、形をほとんど留めなかった子の落差の大きさに反して、出来上がった自分の傑作を前にして「また作ってみたい!」の大合唱に思わず拍手を送りながら、自発的体験学習の意義を噛みしめました。

長谷部 一弘

## 平成8年度博物館講座開催表

## 単 講 座

No.	講 座 名	開催期日	参加数
1	春の星座観測	5月24日(金)	19
2	函館山の自然観察 春	5月26日(日)	20
3	道南の自然を探る(バスツアー)	6月9日(日)	43
4	夏の星座と七夕	7月5日(金)	36
5	色を作って絵を描こう1	7月13日(土)	15
6	色を作って絵を描こう2	7月28日(日)	10
7	親子自然体験教室(キャンプ1泊2日)	7月30日(火)	27
8	博物館資料に触れてみよう1	8月1日(木)	13
9	鉄道の仕組みとJR見学会	8月2日(金)	52
10	展示解説セミナー「幕末の箱館」	8月4日(日)	12
11	博物館資料に触れてみよう2	8月8日(木)	5
12	S P を聴こう	8月31日(土)	24
13	土器を作ってみよう	9月14日(土)	35
14	秋の星座と中秋の名月	9月27日(金)	33
15	函館山の自然観察 秋	10月13日(日)	18
16	冬の星座観測	12月6日(金)	12
17	函館山の自然観察 冬	12月8日(日)	6
18	ロシアのアイヌ資料について	1月18日(土)	38
19	アイヌの衣服	2月8日(土)	27
20	ひな人形をつくろう	2月22日(日)	16

## ワークショップ(通年講座)

No.	講 座 名	開催期日	参加数
1	函館の星空を探ろう	8年4月~9年3月	26
2	函館の自然を探ろう	8年4月~9年3月	25

## 調査・研究(1)

学芸係長 長谷部一弘

## 第1回国際学術研究「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」について

平成7年に引き続き、「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」もようやく最終年度を迎えることになりました。

今回の最終調査は、平成8年7月18日から8月10日の約三週間にわたりロシア科学アカデミー・ペテルブルグ人類学・民族学博物館(MAE)をかわきりに関係資料の追跡調査のためライプツィヒ州立民族学博物館、ベルリン国立民族学博物館を訪問することになりました。

MAEでは、昨年度の継続調査として未調査分の記録調査票記載、カタログ作成用写真撮影、総資料リスト作成、参考資料文献調査を行いました。MAEの特別の計らいで展示資料の調査もすることができました。この結果、MAE所蔵資料は、880件1,382点を数え、実にその八割方を樺太、北海道で収集されたピウスツキー関係資料で占められていることがわかりました。改めて、これらの膨大な資料台帳を含めたアイヌ資料の蓄積と保存管理には、長年培われてきたロシア民族学の歴史と伝統を感じずにはられません。

また、昨年度の調査の際に確認されたMAEからの国外流出資料の一つの行方は、ドイツ・ライプツィヒ州立民族学博物館とベルリン国立民族学博物館で突き止め

ることができました。特に、ライプツィヒ州立博物館では、1907年にハンス・マイヤーを介して搬入されたピウスツキー収集資料が収蔵庫に整然と納められていました。東西ドイツ統合に伴うライプツィヒ博物館からの移管資料としてベルリン国立民族学博物館に納められていたアイヌ資料の存在を確認することができたのも今回の収穫の一つです。

二ヶ年にわたる在ペテルブルグ・アイヌ資料調査は、一応これまで未公開だったロシア屈指のアイヌ資料の確認という大きな成果を得、国際的なアイヌ民族学研究に新たな一ページを開いたものといえます。



貴重な資料をカード▶  
に記録する様子

## 調査・研究(2)

学芸員 尾崎 渉

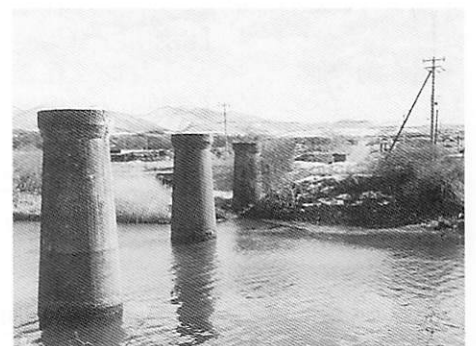
## 道南の交通史 幻の鉄路「戸井線」について

平成9年度に函館市史編纂室より刊行される「函館市史銭亀沢編」に今回、「銭亀沢と戸井線」という内容で執筆する機会を与えられ、東京交通博物館、国立公文書館などの文書資料調査、銭亀沢地区における聞き取り調査をおこない、完成間近で工事中止となった道南地域における幻の鉄路「戸井線」についてまとめることができました。

「戸井線」は、現在のJR五稜郭機関区付近より東へ分岐、史跡五稜郭裏を経て湯川、銭亀沢、戸井へと至る五稜郭～戸井間全長約30kmの国鉄線として開通するはずでした。古くは明治末に私設鉄路としても計画されましたが実現せず、大正11年公布の改正鉄道敷設法により、建設予定176線中の北海道の部に「渡島国函館ヨリ釜谷ニ至ル鉄道」(大正11年「公文類聚第46編巻24」(国立公文書館蔵)として国鉄による敷設が明らかにされています。当時の新聞記事を見ると、銭亀沢村をはじめとする沿線で早期の着工を要望する建設期成同盟会も設置されています。しかし、本格的に工事が着工されたのは昭和13年のことで、目的も当時の時世から軍事色が濃く、戸井要塞への軍事人員や物資の輸送を主眼とした鉄道線へと変わってきました。その後路盤などの完成を見ながら突然工事は中止、戦後も一時道南の私鉄会社による建

設計画や北海道総合開発の中での建設が要望されるなどの動きはありましたがいずれも建設に至らず、ついに幻の鉄道として沿線に道床跡だけが残され、一部はサイクリング道路などに使われています。

もし、この鉄道が建設されていたならば、赤字線ではあったでしょうが、銭亀沢はじめ下海岸の連絡鉄道として、また、函館空港直近を通ることから、空港連絡線としても、十分に活用されていた可能性もあった鉄道ではないでしょうか。



汐留川に残る▶  
戸井線の跡

### 植物資料蔵品目録発行

市立函館博物館の所蔵資料のうち、平成7年度までに目録が発行されていなかった資料は、植物資料と新たに寄贈された昆虫資料および博物館史資料の2分野となっていました。

今回発行される市立函館博物館所蔵植物資料は約1万点におよび、そのほとんどが著名な植物学者であった故菅原繁蔵氏の収集した植物標本で占められています。この標本は菅原コレクションとして、戦前・戦後の植物学

を研究する上で欠かすことのできない貴重な資料であり、各方面から早急な整備が望まれていました。

さらに、残りの資料は、市立函館図書館から移管され、市立函館図書館より発行されている『函館植物誌』の基礎となった、主に塚本角次郎氏の収集した植物標本ですが、これについても早急な整備が望まれていたものです。

今回の蔵品目録の発行により、研究機関・研究者に対する便宜が図られると思います。

佐藤 理夫

### 平成8年度新収蔵資料紹介

#### ○寄贈資料

- ・火時計 1件1点  
【函館市・山村 豊氏寄贈】
- ・函館HBCラジオ劇場場内配置図 他 14件14点  
【函館市・七尾 佳佑氏寄贈】
- ・函館仮博物館写真 他 5件8点  
【酒田市・池田 温雄氏寄贈】
- ・函館市街写真 1件5点  
【松前町・富田 富智氏寄贈】
- ・人物集合写真 他 13件14点  
【函館市・高島 ミセ氏寄贈】
- ・夜景（油彩画） 1件1点  
【函館市・三箇 三郎氏寄贈】
- ・東郷元帥肖像写真 他 4件5点  
【函館市・山中 藤作氏寄贈】
- ・小川彌吉像（油彩画） 他 4件4点  
【函館市・小川 靖彦氏寄贈】
- ・蜷川式胤日記（マイクロフィルム） 1件1点  
【寝屋川市・東野 進氏寄贈】
- ・カジキマグロの角（骨） 1件2点  
【恵山町・泉 稔氏寄贈】
- ・オオワシ 1件1点  
【渡島支庁寄贈】
- ・トランク 1件1点  
【札幌市・小泉 きよ氏寄贈】
- ・伝・青い目の人形 1件1点  
【函館市・蘇馬 愛子氏寄贈】
- ・自在鉤 他 2件2点  
【函館市・久保田 貞子氏寄贈】  
(平成9年2月1日現在)

#### ○寄贈図書

- ・山陽頼先生百年祭記念遺芳帖 他 2件2点  
【函館市・駒井 惇助氏寄贈】

#### ○購入資料

- ・函館座芝居ポスター 1件4点
- ・アイヌ風俗絵馬 1件1点
- ・最新函館全景 1件1点



▲安永4年に奉納されたアイヌ風俗絵馬

### 職員の異動紹介

- 近江 幸一 管理係長→ともえ学園主査
- 寺本 忠 商工観光部テクノポリス推進室  
工業振興課主査→管理係長
- 七尾 佳佑 五稜郭分館長→市史編さん室主査
- 長谷川 寿雄 博物館主査→五稜郭分館長
- 福田 隆一 五稜郭分館→退職
- 格口 由美 函館病院事務局分室事務課→  
五稜郭分館
- 平方 麻衣 郷土資料館臨時職員採用

—誌名SARANIP(サラニップ)について—

アイヌ名：シナの樹皮で編んだ袋。  
博物館情報や研究成果などをSARANIPに入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっていくようにと命名したものです。



SARANIP —サラニップ— No.36 1997.3.31発行

編集・発行 市立函館博物館  
〒040 函館市青柳町17-1(函館公園内)  
TEL 0138-23-5480  
FAX 0138-23-0831